

大妻精神の継承と具現

- 聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 5 -

Devolution and realization of Otsuma spirit

-Through interview survey-Looking for our Otsuma's mind, telling and way 5-

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 井上 俊也³
Sawako Takagaki¹, Sayuri Inoue², Toshiya Inoue³

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所

²一般財団法人大妻コタカ記念会, ³大妻女子大学キャリア教育センター

キーワード：大妻コタカ, 大妻精神, 聞き取り調査

Key words : Kotaka Otsuma, Otsuma spirit, Interview

1. 研究目的

創立 110 年を超え, 中期計画を見直した大妻学院にとってその実現をより価値あるものとするためには, 建学者である大妻コタカの精神を継承し発展させることが必要であると考え.

本研究では, 大妻コタカが教育者として社会に与えてきた影響力を明らかにするために, 大妻コタカと関わりがあった方々及び大妻コタカの教育を受けた方々の聞き取り調査を行い, その方々がコタカとどのように関わり, どのようなキャリアを積み, 大妻精神をどのように継承したかを明らかにすることを目的とする.

また, 大妻精神の継承のために, これまでの研究調査を基に精査作成した DVD「あなたの知らない大妻の歴史」の上映, 大妻コタカの郷里である広島県世羅郡世羅町で開催した「大妻コタカの生涯と大妻学院の歴史」展示, および「大妻コタカ～世羅が生んだ教育者」と題した域学連携講演会を通じて大妻精神の継承を試みてきた. さらに大妻コタカの故郷世羅郡甲山地区の小学校 2 校・中学校 1 校の教員対象, 地域自治体対象, また大妻地方同窓会会員対象等で大妻コタカに関する講演会を行い, 大妻精神の継承方法を模索する.

2. 研究実施内容

2-1 章「聞き取り調査等の実施」

(2-1-1) 一般財団法人大妻コタカ記念会および世羅町教育委員会, 世羅町甲山地区自治会などの協力を得て, 新たな聞き取り対象者調査に努め, 聞き取り調査を実施した.

(2-1-2)大妻コタカの精神の源である大妻コタカを育んだバツボーンについて明らかにするため, 大妻コタカ生家(広島県世羅郡世羅町川尻)に於いて資料調査, 旧久恵地区住民からの聞き取り及び資料調査及び大妻コタカ実母の実家(広島県府中市斗升)の現地調査を実施した.

2-2 章「動画 2 本の制作」

大妻コタカの精神を継承し発展を目的として開催を予定していた講演会は, すべて新型コロナウイルス感染症予防対策のため中止となり, 代替えとして大妻コタカを継承する動画 2 本の作成を試みた.

2-1 章「聞き取り調査等の実施」

新たな聞き取り対象者獲得調査及び聞き取り調査実態(2-1-1)と現地調査(2-1-2)について時系列で示す.

2-1-1(1) 令和 2 年 9 月 29 日: 大妻コタカ生家(広島県世羅郡世羅町川尻 914)に於いて, 広島県府中市立上下高校同窓会関係者に届けられた「大妻先生が写るアルバム調査」に関する聞き取り調査を実施.



2-1-1(2) 令和 2 年 10 月 27 日: 向原生涯学習センターみらい・研修室(大広島県安芸高田市向原町坂 333)に於いて, 大妻コタカ故郷の旧久恵集落出身で, 大正時代に大妻学校で学ん



だ岡田絶子氏（旧姓山口）の子息岡田信造氏（前頁右下写真右から2人目）から聞き取り調査。

2-1-1(3) 令和2年11月29日：世羅町せら文化センター（広島県世羅郡世羅町1158-3）に於いて、新たな聞き取り対象者調査を広島県世羅郡世羅町教育委員会林光輝氏（写真中央）から実施。



2-1-1(4) 令和2年11月30日午前：尾道ふれあいの里・研修室（広島県尾道市御調高尾1367）に於いて、昭和40年代世羅高校を卒業後、当時大妻中高教員だった山尾万里子先生宅に下宿し、昼間は山尾先生宅の家政婦として働き、大妻女子大学の二部に学んだ平田忍氏から聞き取り調査。



2-1-1(5) 令和2年11月30日午後：株式会社ヒロボー・会議室（広島県府中市桜が丘3-3-1）に於いて、昭和18年大妻技芸学校高等家政科を卒業し、結婚後、夫妻で紡績会社を創業し、女性労働者集めにアイデア豊富に奔走し、中学卒業の女性労働者のために公認の高校を工場内に創設し大妻コタカが目指した女子教育・人間教育を広島県府中の地で実践した松坂都氏（旧姓大馬）の孫松坂晃太郎氏（写真）より聞き取り調査。



2-1-1(6) 令和2年12月17日：富山県富山市梅沢町とリモート（Skype）にて、昭和31年に中学卒業後富山県から単身上京し、大妻コタカ宅に居住し大妻高校に通学した道嶋愛子氏（旧姓水野）への聞き取り調査。



2-1-2(1) 令和2年9月29日・10月27日・11月29日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻）に於いて、生家に残る資料調査として書籍調査ほかを実施。

書籍調査では、明治期の教科書が多く、中には江戸時代の教科書もあり、辺境の地ではあるが熊田家は学殖豊かな家族であったことを知る。書籍のほか



は、軍隊記念品など。

2-1-2(2) 令和2年11月29日：木村卿彦宅（広島県世羅郡世羅町川尻）に於いて、ダム湖底に沈んだ旧久恵集落の人物写真の確認調査を実施。



2-1-2(3) 令和2年11月30日：福場家旧宅（広島県府中市上下町斗升）に於いて、大妻コタカ母親の実家である福場家旧宅調査を、福場家の協力を得て実施。



福場家は地元（上下町斗升）の有力者で、地元に貢献したことにより訓徳の碑が残されていた。コタカを育んだバックボーンを明らかにしていく手掛かりを得た。

2-2 章「動画2本の制作」

大妻コタカの精神を継承し発展を目的として開催を予定していた講演会が、すべて新型コロナウイルス感染症予防対策のために中止となったため、代替えとして大妻コタカを継承する動画2本の制作を試みた。

2-2-1 動画『女子教育の先駆者大妻コタカ』

パソコンソフト PowerPoint[®]、Adobe[®]Illustrator[®]、Adobe[®]Animate[®]で一部アニメーションを創作し、音声はパソコン音声データを利用して全てオリジナルで制作をした。動画内容を以下に示す。

2-2-1-(1). はじめに

この建物（生家）は、東京・千代田区のキャンパスを拠点とする総合大学、高校、中学をもつ大妻学院を110数年前に創設した「女子教育の先駆者」大妻コタカの生家である。



コタカが生まれ育った集落は、平家の落人伝説が残る辺境の地で、電気は太平洋戦争が終わってから通じた場所であった。



昭和34年の三川ダム建設にともない、生まれ故郷・久恵（くえ）は、目の前のダム湖の底に沈んだ。しかし、コタカの生家は、築数百年の珍しい手斧作りの建物であったので、現在の場所に移築された。

生家は、コタカの実家である



熊田家が長く管理をしてきたが、平成29年に熊田家から寄贈を受けて、大妻学院の同窓会組織である一般財団法人大妻コタカ記念会が管理をして

いる。

この家では食事処「久恵風穴の里ごもくめし」が営まれ、食事をとりながらコタカの生家を見学できる。

2-2-1-(2). 生い立ち

コタカは、明治17年、農家の熊田家の6人きょうだいの末っ子として生まれた。熊田家は30数代続く旧家で、かつて庄屋を務めたことがあり、使用人もいる大きな家であった。

コタカは、3歳の時に父親が亡くなり、母親に育てられた。コタカの母親は、6人きょうだいの女手ひとつで育て、大変な苦労だったと思う。

コタカの母親の口ぐせは「手まめ、足まめ、耳まめ、目まめ、口まめだけは気をつけよ」であった。「まめ」とは、達者なことで、手足、耳や目の達者なのは良いが、口達者だけは気をつけなさいという注意で、コタカはこの母親の教を自戒とした。その母親も、コタカが14歳の時に亡くなった。

2-2-1-(3). 辺境地ゆえの苦勞

小学校1年生になったコタカは、約3.3キロ離れた学校まで淋しく長い山道を通るのが嫌で、学校嫌いで、勉強ができなかった。



5歳上の兄が勉強をみてくれるようになり、勉強の楽しさを知り、それ以来勉強が好きになり、成績もよくなった。

この時の体験により、学校開設後は、一斉授業の弊害を避け、なるべく少人数の生徒を受け持つようにつとめ、大妻の教授法は好評となり学校は発展した。

2-2-1-(4). コタカの学び



高等小学校卒業後は、広島県立世羅高校の前身である多田道子裁縫所へ進んだ。その後、地元の尋常小学校の代用教員になったが、向学の志やみ難く、できれば数学の勉強をしたいと、18歳の時に上京する。



上京後、数学の勉強は叶わず、

上野の叔父の家に厄介になり、家の手伝い、アルバイトをしながら、裁縫学校・教員養成所で苦学を続け、現在の横浜国立大学を卒業し小学校の先生になり、裁縫と手芸の研究も続けた。

2-2-1-(5). 結婚そして学校創設

24歳の時に、宮内省に勤める元軍人の大妻良馬と結婚をし、小学校を退職した。



宮家の官舎での生活の中、子どもがなく、家で袋物や壘細工などの手芸をしていると、近所の娘さんたちが集まって来て、教えてほしいと請われた。



コタカの手芸はセンスが良く、目を引く物で、新しい手芸だった。小さな家は若い娘たちでにぎわうようになり明治41年に私塾がスタートした。

大正5年、東京の三越呉服店（現在の三越デパート）の展覧会に手芸品の出品を勧められ、出品すると評判を呼び、学校認可申請を勧められた。



思いがけない話であったが、夫の良馬に「やってみたら」と背中を押され、大正5年に大妻技芸伝習所を創設。大妻女子大学のスタートである。

その後、当時の女子の就学意欲の高まりと技芸教育への求めに応じ、学校は発展していく。

2-2-1-(6). 教育の振興に尽力した姿



コタカは「誰でも、いつからでも学べるように」と門戸を広げ、さまざまな工夫をして教育に尽力した。



『講習会』：女性が高等教育を受けることが容易ではない時代だったので、地方の人のために授業のない時は『講習会』を開催し、教材の通信販売を行い、好評を得た。



『講義録』：『講義録』に基づく通信教育にいち早く取り組んだ。

『夜学校』：大正14年には日本で初の文部大臣認可の女子の夜学校を開設し、卒業後は高等女学校の資格が得られると働く女性に歓迎された。



大正のラジオ放送開局時から昭和にかけて週に1回、裁縫、手芸、作法その他主婦や若い人たちの心得ともいえるものをラジオ放送で行った。



大正時代から有名な婦人雑誌、少女、少年、幼年倶楽部などに礼儀作法、家事、裁縫手芸などについて執筆をした。

新聞の家庭欄に裁縫手芸の記事が掲載され、婦人相談の欄を担当し、コタカの名前、大妻学院が世間に知られて行った。

辺境の地から、東京のまん中にも続く、大妻学院を明治・大正の女子教育勃興期に創設したコタカの立身出世伝は、婦人雑誌や少年少女向けの本で紹介された。



2-2-1-(7). 苦難を乗り越える人生

関東大震災：全財産を投じて建てた校舎は、翌年大正12年に発生した関東大震災で、全焼し、財産を失った。



しかし被災の3日後には、学校の再建に立ち上がり、次の年には、以前より大きな校舎を再建した。

夫の急逝：校舎再建の喜びから5年後、夫の良馬が急逝。これまで自分を支えてくれた夫に先立たれ悲しみに打ち沈むが、学校に2000人の教え子が待っていると悲しみに負けてはならないと奮い立った。



戦後、「多くの学校の校長でありながら、あらゆる婦人団体に相当な役割を持った」ために教職追放となり5年の間苦難に堪えた。昭和26年に追放が解除され、大妻学院理事長・学長・校長に復帰し、女性教育者としての功績に対し藍綬褒章、女性初の生存者叙勲である勲三等宝冠章を受章した。

2-2-1-(8). おわりに



昭和45年コタカは、夫と共に信念とした報恩感謝の理念を掲げ、良い妻、賢い母、役に立つ社会人の教育一筋に、ひたすら歩み続けた人生を閉じた。85歳であった。

現在大妻学院は創立110余年となり、4中学、4高校、1短大5学部ある大学、大学院を擁し、学生生徒数12,140余名を有し、コタカの精神を受け継いで「社会に貢献する自立した女性を輩出する」女子教育機関として邁進している。以上

2-2-2 動画『恥を知れ 大妻コタカ先生からあなたへ』

PowerPoint®とパソコン音声データを利用し制作。解説を以下に示す。

2-2-2-(1). はじめに

女子教育の先駆者である大妻コタカは、哲学者ではないが、苦難の多い自身の実践体験からにじみ出た言葉には、説得力があった。今の時代にも響く、コタカの言葉を、あなたへ贈る。



2-2-2-(2). 「恥を知れ」



「恥を知れ」は、夫良馬の大妻家の家訓で、大正6年学校創設時に校訓として制定され、今も大妻学院の校訓である。

コタカは「恥を知れ」について、つぎのように言っている。「この『恥を知れ』は、決して他人に対して言うのではなく、あくまでも自分に対して言う言葉である。人に見られたり、聞かれて、恥ずかしいようなことをしたかどうか、と自分を戒めることばである。」



朝夕に、自分の心に問いかけ、自分自身を高め、自己を愛そう。

広島県世羅郡世羅町に残る旧大妻女子専門学校跡の石碑。世羅町でも大妻の教育が受けられていた。(昭和27年～昭和56年)

2-2-2-(3). 「失敗にくじけない勇気」



コタカは、他人の意見に耳を傾け、自分の考えを堂々と主張する姿勢を持つことによって、多方面にわたる交流を重ねた。

晩年、若い人に失敗を恐れずチャレンジしようとして次のように言っている。

「若い時代には、おおいに外に向かって自分を

進ませてみる必要があると思う。失敗すればそれが一つの体験になり、一番大切なことは、それにくじけないだけの勇気が欲しいということである。私は、随分あらゆることに頑張ってきたつもりだが、今になってふりかえてみると、もっと自分を試みるべきだったと悔やむことが沢山ある。ですから可愛い子どもたち（教え子たち）に、私に代わり、うんと張り切って、若い時代を充実してもらいたいと望んでいる。」



←昭和14年雑誌「婦人公論」に掲載の写真。共に東京府・市委員として活躍の村岡花子氏らと。

昭和15年雑誌の座談会。時代を
行く女性たち柳沢
白蓮氏らと。→



←大正6年8月
沢栄一子爵来校時の写真。現在の



東京都千代田区三番町に校舎新築中に来校。

昭和15年東京婦人会館で。小林一三氏の文化事業に協力。→



2-2-2-(4)。「感謝の生活」



私は、いつでも和やかに、平らな気持ちで、できるだけ善意に解釈して、すべてに感謝の気持ちを持ちたいと思っている。

感謝とか、有難いとかいうことは決して強制的ではなくて、ごくありのままの感情から流れ出る気持ちだと思う。私どもは毎日の生活にいかにも多くの恵みを受けているかと考えると、どんな小さなものにも、つまらないことにも精一杯の愛情をもって生きようと思う。

コタカの感謝の言葉。「(コタカの音声) 今日ございますのは夫のお陰もむろんございますけれども、私自身は何も出来るものではない、役立たないものを、今日にして下さいましたのはみなさんのおかげでございます。本当に心から感謝申し上げます。」

2-2-3 動画の公開・上映



2-2-3-(1) 令和2年9月29日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻 914）に於いて、「大妻精神の継承と具現」の方法を模索するために

制作した音声解説つき動画『女子教育の先駆者大妻コタカ』を、コタカ生家で上映し、訪問者を対象に継承の取り組みを開始。

2-2-3-(2) 令和2年10月28日：世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町甲山159）に於いて、世羅町甲山地区自治会の方と面会し、「大妻精神の継承と具現」の方法を模索するために制作した音声解説つき動画を、世羅町13の自治会へ配布協力を得て、世羅町内各自治会での大妻精神継承の



取り組みを開始。

最初に作成したDVDはPC対応のみであったために、各自治会での視聴が難しく、家庭用DVDプレーヤーで視聴ができるように作成し直し、再度配布した。

2-2-3-(3) 令和2年10月：「大妻精神の継承と具現」の方法を模索するために制作した音声解説つき動画をYouTubeにアップした。

大妻コタカ精神の継承方法の模索として制作した動画2本は、DVDメディアにして世羅郡世羅町甲山中学校、世羅町各自治会及び一般財団法人大妻コタカ記念会地方同窓会に配布し、視聴いただいた。さらにYouTubeにもアップし、限定公開の後、一般公開し継承に努めた。

3. 調査結果

調査結果を2章に分けて示す。

3-1章 大妻コタカが教育者として社会に与えてきた影響力を明らかにするために、大妻コタカの教育を受けた人が、コタカとどのように関り、どのようなキャリアを積み大妻精神をどのように継承したか。

以下の4名の聞き取り調査結果を示す。

- 3-1-1 岡田絶子氏
- 3-1-2 松坂 都氏
- 3-1-3 茅野壽義氏
- 3-1-4 斎藤幸子氏

3-2章 動画公開後について。

以下の5件での上映等について示す。

- 3-2-1 甲山中学校
- 3-2-2 大妻地方同窓会
- 3-2-3 世羅町自治会
- 3-2-4 大妻コタカ生家
- 3-2-5 その他

3-1 章 大妻コタカの教育を受けた人がコタカとどのように関り、どのようなキャリアを積み大妻精神を継承したか。

3-1-1 岡田絶子氏

対象者：岡田絶子（旧姓山口）

卒業校：大妻芸芸学校高等芸芸科

在学年：大正 12～15 年

調査日：令和 2 年 10 月 27 日

聞き取り対象者：岡田信造氏（岡田絶子氏の長男）

大正時代にコタカと同じ故郷から上京し、大妻でコタカから直接教えを受け、大妻精神を継承した岡田絶子氏について、子息岡田信造氏の聞き取り及び岡田信造氏作成の資料を基に次に示す。

3-1-1 (1) 大妻学校進学まで



岡田絶子氏（以下絶子氏）は、ダム湖に沈んだコタカと同じ広島県世羅郡三川村久

恵の出身である。絶子氏の実家山口家は、コタカの実家熊田家のすぐ隣で、父親を早く亡くし母親に育てられ、コタカの生育環境に符合している。写真は、久恵集落。

大正時代この地方では学校を卒業すると大抵の女子は農業に従事するか、親戚又はその筋の宅に引き取られていく者がほとんどであった。しかし、絶子氏は何が何でも教師の道に進みたいと心に決めていたという。

しかし山口家は実父が早くに亡くなり、跡取りの長男勝氏も大阪府池田師範学校卒業後に他界し、長女一代氏が家督を継ぐことになり、広島県福山師範学校を出た小学校教諭の健一氏を養子に迎え、一家の実権は義兄健一氏が握っていた。

四女の絶子氏は将来の進学先について、義兄健一氏には相談しにくく遠慮がちであったという。

そんな中でもっと勉強がしたい絶子氏は、家にあった書き方・綴り方の本は片端から読み、「いろはカルタ」やことわざの意味は全部覚え、記憶力には自信があったという。毛筆は独学で勉強し、



義兄健一氏が手を添えてくれたこともあったという。

このような向学心を示す絶子氏の姿を見た家族、特に実母コト氏は娘絶子氏の将来を考え、経済的な援助は出来ないが「山口家から正式な女教師を出そ

う」と道を拓くことをしたという。写真は左が絶子氏、右は絶子氏母コト氏。

そして苦学の道にはなるが、隣家で縁戚関係にある東京の大妻コタカのもとへ身を寄せ、勉強をすることになった。教育の本筋は子供の希望を叶えることであるが、絶子氏の希望を叶えた母コト氏も義兄健一氏も立派な人である。

大正のこの頃、既にコタカの創設した学校は、村一番どころか県内でも知られた有名校になっており、絶子氏が大妻に進学することは風評になったという。山口家の家長である義兄健一氏は「本人が希望することを叶えてやるのが親・家族のつとめだ」と応えていたという。

これまでの聞き取り調査で、この時代この地方（備後地方）から大妻学校に進学する者があった時は、出征兵を見送るように万歳万歳と盛大に見送ったのだという。コタカの学校は憧れの学校だったのだ。

3-1-1 (2) 切磋琢磨の学生生活

絶子氏は、勤労学生としてコタカの身の世話や家の掃除に精を出し、勉強に励んだ。学校創設時からあった給費生である。

次の写真は、一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵の写真で、詳細欄に「大正 13 年校舎に寄宿して事務等の補助を行っていた勤労学生」とのみあり、



左端に若かりしコタカの姿を見つめることが出来るだけである。

しかし、絶子氏の聞き取り調査をきっかけに、子息より借用した絶子氏のアル

バムを調査しているうちに、左の写真前列右から 2 人目が絶子氏であることが判明した。

更に聞き取り調査を通して前列右端に写っている人が富山県から上京した水野菊枝氏（旧姓今市）で、前列左コタカの隣の方は、通信教育である「講義録」で学び、コタカの指導を受けたくて愛知県から上京した中条しな氏（旧姓加藤）であることも分かった。このふたりもまた、コタカと深くかわり人生を送った人たちである。

この写真で絶子氏は在学中、良き仲間恵まれていたことが分かった。年齢もまちまちで、学ぶ

学科も違ってはいたが、互いに向学心に燃えて、切磋琢磨しコタカの教えを学んでいたのである。

この頃の大妻学校には、大正 14 年制定（大正 15 年修正）の項目数 163 からなる『訓徳要項』があった。項目番号 1『修養』として、「つとめて向上せよ、修養は汝に自覚を与え、信念を与え、而して汝の凡てを幸福に導くべし。」と教えている。

3-1-1 (3) コタカの教え「手紙による親孝行」

絶子氏は毎月 2 回親元に日常のこと、初めて体験したことを書いた手紙を送った。これはコタカの全生徒に対する指導方針であった。集会の時に必ずコタカが口にする教えの一つは、親に手紙を書くことで、親のいない人は兄弟姉妹に、兄弟姉妹もいない人は「私」に手紙をくださいと言われたという。

昭和 30 年代に寮生だった卒業生からも同様にコタカの教えを聞いたことがある。昭和 30 年代官製葉書は一枚 5 円で、「5 円の親孝行」と称して、コタカは親元に手紙を！と提唱されたという。昭和 40 年代の寮生だった卒業生の中には、今も実家に出した葉書を大切に保存している方がある。

大正 14 年に制定された『訓徳要項』の項目番号 68 には『父母の恩』があり、「吾等は父母の分身として生まれ、その慈愛と撫育とによって成長したるのみならず、教育に職業に、其の他凡ての上には父母の配慮を受け、其の恩恵に浴して、人となりたるものなれば、父母は、吾等に最も近き恩者なる上に、吾等の一生に就いても、最も真剣に案じ、且つ将来の幸福を祈り呉る特に親しみの深き恩者なり。古来「父母の恩は海より深く、山より高し」と称したるは、その恩恵の洪大無辺にして、孝行の大切なることを示されたる訓へなり。」と教えている。

項目番号 69『孝行』では、「父母に心配を掛けず、喜ばせることが子どもとしての大切なる心かけにして、斯くすることが孝行の第一歩なり。」とある。

絶子氏も手紙を記した。一生懸命頑張り、楽しく生活している様子が綴られた絶子氏からの手紙は、家族皆が読んだ後、三女の姉三代氏が「宝」のように大切にし、何度も何度も読み返し、勉強することがこんなにも楽しいことなのかと知り、向学心に燃えるようになったという。

絶子氏は姉三代氏の一連のことをコタカに話すと「それは良いこと。是非上京するように言いな

さい。そのための部屋を準備する。勉強したい者は、とにかくどうやっても勉強しなくちゃ。」と言われたという。

しかし、その矢先、長姉一代氏が亡くなり三女三代氏と義兄健一氏との結婚話が持ち上がり、上京を諦めることになってしまった。このことをコタカに伝えると「それは良いことよ。山口家の繁栄のためには一番いいことよ。」と言われ、絶子氏は啞然としたという。

コタカは「近々結婚をします。」とか「結婚が決まりました。」という生徒には「嫁入りをして実家のことは大切にしなさいよ。実家の者ほどあなた方の幸せを願う者はいないのよ。」と言われていたそうである。

3-1-1 (4) 関東大震災

絶子氏は在学中の大正 12 年 9 月に発生した関東大震災に遭遇している。地震発生時は教室の柱に「さぼりついて（しがみついて）」助かったのだという。

郷里の広島では関東大震災後、大妻学校と連絡が取れなくなり、親代わりの義兄健一氏が安否を心配し、大妻まで捜索に来てくれたという。絶子氏は義兄健一氏との再会をそれまでの人生の中でこれほど嬉しかったことはなかったと、後年自分の子供たちに繰り返し話したという。

大妻学校はこの震災で私財を投じて建築したばかりの校舎を火災で失い、財産を無くした。しかしその後、職員（給費生）が一丸となり黙々と片付けをして、復興に尽力をした。

絶子氏は政府から「後藤新平」という人が来てコタカと話しているのを目撃している。その後大妻学校が私学ながらいち早く復興できたのは、コタカのこの時の説明が良かったからだと言われている。

絶子氏がこの大震災で得た体験は、社会に身を置いた時に大きな力となり、身に降りかかる困難や難しい生徒指導、随分年上の生徒への対応も勇気を出して事に当たることができたのだという。

震災に遭い多くの生徒を火災から守り、震災直後の困難の中で冷静に指揮したコタカの姿を見て、懸命に復興に尽力したコタカや良馬の姿に直接触れて絶子氏は多くを学んだ。「偶然なことはいつ起こるかも知れない。それに備えなさい。そういう時こそ冷静に。」コタカの教えである。

絶子氏は大妻技芸学校高等技芸科で学び大正 15

年に卒業している。

次の写真左は大正 13 年夏のコタカ。右は絶子氏が高等技芸科卒業時の写真で、後列右から 2 人目が絶子氏である。



3-1-1 (5) コタカからの学び

絶子氏は卒業後、大妻の教員として勤務をした。

次の写真は昭和 2 年大妻技芸学校・大妻高等女学校の女性の先生で、後ろから 2 列目右から 3 人目に絶子氏である。



次の写真は昭和 3 年 3 月の卒業記念写真である。

写真には校主良馬が記した教員名があり、前列右端に山口と書かれ絶子氏の姿がある。良馬はこの写真が撮影された翌年の昭和 4 年 3 月に急逝した。この写真は、校長コタカと校主良馬が共に揃った貴重な卒業記念写真である。



絶子氏は大妻での勤務のなかで、学生時代から勉強を重ねた裁縫・手芸・調理・生け花について、違った角度から、また高度な指導を受けながら務めたそうである。

良馬逝去後、コタカは良馬が担っていた仕事も引き受けたため学外の仕事が増え多忙を極めたが、絶子氏が大妻に在職していた頃は良馬存命中で、

コタカから直接教えることのできたのである。

今では常識となっている「味付け」には「さ行」から、砂糖、塩、酢と進め、ソースの必要な食べ物には最後に振りかけること。

生け花は、「真・副・体」の調和が取れていればよい。あまり細々としたことを求めなくてもよい。材料を伸び伸びと使ってその人の創造性（創造力）を高めることがよい。材料は本人に選ばせるのがよい。草を使う場合は「伸びきった」ものを使わせること。

生徒の日常指導に困ったときは「とにかく相手の話をよく聞いてやること。また、その子を取り巻く周囲の者の意見・話も聞いてやるとよい結論が出る。一度言ったこと、指導したことは取り返しがつかないという心構えを持つことが大切よ」とコタカから学んだという。

偉い人は難しい理屈よりも日常の心構えを易しい言葉で繰り返すのだと思ったという。

コタカの側で共に生活をした卒業生やコタカの親戚の多くが、コタカの口からほとぼし出る一言一言は心に残る有難いものがあつたと言っていた。

また、絶子氏は在学中に刺繍を加藤清氏に指導

を受けている。この指導は後述する卒業後の作品制作に大きな影響を与えることになった。



左は大正 15 年創立 10 周年記念式典

の日の写真である。前列中央が絶子氏。

3-1-1 (6) 大妻教育の真価を問うべく実社会へ

昭和 3 年 5 月発行『大妻時報』第 2 巻第 5 号に、絶子氏の進路について次のように記されている。

「山口絶子様 高技を卒業して母校に教鞭を執っておられましたが、今度兵庫県津名郡一宮実践女学校へ赴任せられました。」

絶子氏は、昭和 3 年 4 月淡路島に開設したばかりの一宮実践女学校（現在の兵庫県立淡路高等学校）へ赴任した。東京から女先生がやってくると騒がれたに違いない。

淡路島は当時も玉葱の産地で、地元の人がそれをうまく料理して毎晩のように代わる代わる下宿に届けてくれたという。その作り方を教えてほしいと頼むも「それだけは」と誰も応じてくれなか

ったという。「企業秘密」にしていたのだと思つたと絶子氏は後年子息に話している。

「企業秘密」とは、ユーモラス捉え方である。地元の人からすれば、東京で勉強を積んだ女先生に教えるなんて滅相もない、といった感じだったのでと考える。絶子氏は調理の授業も担当したが、「企業秘密」の玉葱は避けたという。地元のプライドを傷つけないスタンスだったのである。

授業では大妻で学んだ葉野菜を摂らないとビタミンが欠乏し人体に影響があることを含めて、大妻で学んだとおりに行ったという。この大妻の教えは地元で歓迎された。

地元の人たちは温かく家庭的で、生徒たちは有名な大浜海岸に絶子氏を連れて行き、アサリの捕り方を教えてくれたという。教師の道に進みよかったと思つたそうである。このような学校での様子を、大妻学校を出てたった一人の他流試合について何度かコタカに手紙を送って知らせると、必ず激励する返信が届いたという。

実社会で大妻教育が歓迎されたことを知らせる便りは、コタカにとって何よりも嬉しかったに違いない。コタカは常日頃から大妻教育の評価は、実社会にひとり出て奮闘する卒業生によりもたらされるものであると同窓会誌に記している。

このようにコタカは優秀な卒業生を地方の学校へ送り出し、大妻教育を広めたのである。

3-1-1 (7) 大妻技芸の真価の証明

その後、絶子氏は広島県福山市川口町の青年学校に転任し、広島県甲奴郡清武村（現在の広島県府中市上下町）の小学校長の岡田勇氏と結婚。



写真は絶子氏結婚時の写真。○枠内にコタカが写っている。

この絶子氏の聞き取り調査の後、夫勇氏の勤務地である広島県

甲奴郡清武村は、コタカ実母の出身地で、コタカのいとこが村長を務めていた地であることも分かった。

昭和8年1月8日発行大妻学校同窓会誌『ふる里』（第7巻第一号）にコタカの動向が掲載されており、昭和7年1月郷里広島での講演の帰途、福山駅で列車発車までの30分間を駅前のささやか

な店で夕食をしながら川口町小学校の岡田絶子（旧山口）さんと逢つたと記されている。コタカと絶子氏の関係の深さが分かる記事である。

絶子氏が福山市川口町の青年学校に勤務中の昭和8年、広島県は青年学校創立10周年記念行事として県下の各青年学校に対し、一点ずつ作品の出版を義務づけた。福山市川口町の青年学校では、技芸担当の絶子氏に白羽の矢がたった。

絶子氏はいい着想もアイデアも浮かばないまま思い悩んだある日、開いた本の間から落ちた葉に福山城の全景写真があり、福山城の「刺繍はり絵」の制作を思いついたという。

図画の先生が葉の写真を拡大し、原図を描いてくれたという。材料は技芸の授業で使った残りの布ばかりだった。働く主婦として、時間のやりくりをしながら舅・姑・夫の励ましを受けて完成させた。約2ヶ月を要した。

作品は青年学校創立10周年記念作品展でみごとに最優秀賞を受賞し、いろいろなところで表彰され、絶子氏は恐縮したという。コタカに報告をすると、大妻技芸が評価され大いに喜び、作品の写真と完成までの手順を書いた手紙を送ると校内に飾られたという。しかしそれらは、太平洋戦争の空襲で灰になってしまったと伝え聞いたそうだ。

図案にした福山城は、昭和20年8月の空襲で天守閣が焼け落ちた。昭和49年12月、中国新聞に絶子氏が昭和8年に制作した福山城全景の作品が紹介された（写真は記事の一部）。



「人様に見ていただくには恥ずかしい作品。」とここでも謙虚に語っている。作品を譲ってほしいと望むものがあつたが、絶子氏にとってこの作品は「当時の生活と思い出をはり合わせた家族の大切な記念碑」であると手放すことをしなかつたそうである。



また、この作品は大妻で刺繍を教えてくれた加藤清氏への感謝を込めて専心誠意に努力した作品でもあつたという。

左の写真は絶

子氏のアルバムに収められていた大正時代の大妻学校での一枚である。左端に絶子氏、左から3人目に刺繍の先生であった加藤清氏が写っている。

戦時中、大妻は軍に命じられ学校工場で「軍旗」制作の任に当たった。「軍旗」は、陸海軍の大元帥である天皇から直接親授される極めて神聖なもので、天皇陛下のお身代わりとして戦場で兵士の士気を鼓舞するものであった。その「軍旗」の制作を大妻が特に選ばれたことは、大妻の技芸が優れていたことを意味していた。そして当時は大変名誉なことであった。

「軍旗」は日本刺繍の枠に塩瀬の羽二重の布を張り、一針ずつ刺して作られ、制作の責任者は、言うまでもなく絶子氏に刺繍を教えた加藤清氏であった。

絶子氏は、今自分があるのは大妻での学びのお陰で、この作品が出来たのは加藤清氏指導の賜物であると感謝を忘れなかった。

3-1-1 (8) 家族の応援

絶子氏は福山市川口町の青年学校勤務時代に結婚をしたが、夫の勤務先とかなり離れていたため別居せざるを得なかった。

その後、広島県甲奴郡吉野村（現在の広島県府中市上下町吉野）の青年学校に転勤し、夫の実家から歩いて通勤したが、夜道が危ないと舅・姑・夫とも学校の近くに下宿するように勧めてくれたという。

戦前の時代、働く女性をこのように応援する家は大変稀なことであった。地方では東京で生活をした人は一目も二目も置かれた時代であったそうだが、舅・姑・夫も良くできた人たちで、絶子氏の力を認めていたことが分かる。

絶子氏もまた時代に応え、それ以上に努力した人であったことが分かる。人々に対する感謝を決して忘れることがなかったと子息の信造氏から聞いた。

戦時下、夫は県からの職命で広島県甲奴郡振興主事となり、終戦後戦争責任を問われ「公職追放」となった。無情にも村長をしていた実家の義兄健一氏も公職追放となり、その頃絶子氏も教職を退くことにしたという。

3-1-1 (9) 私塾開設

昭和21年、絶子氏は大妻で学んだ裁縫・刺繍・生け花・食物の知識をいかして自宅に「私塾」を

開いたそうである。

割と広い中庭には大きな鍋が二つ用意され、その一つは週に1回くらい調理実習用に使われ、カレーや味噌汁などの実習が行われた。もう一つの



鍋は染色実習のための物だった。燃料の薪は、夫が夜な夜な準備をしたそうである。（写真は大妻

学校の染色実習の様子）

生け花のある日は、材料をすっかり忘れた生徒に鎌を貸し、家の裏山や畑でその時節の花・木・背の高い草などを採らせて教材にさせていたという。

時は戦後、物資のない時代である。絶子氏の私塾に来れば、家にあった布切れが、手袋・ハンカチ・赤ちゃんの靴下へと工夫しておしゃれな作品ができたそうである。生徒たちは家にあった布を風呂敷に包んで担いで来たという。

絶子氏の私塾は、コタカの教育が常に実践を通しての教育であったように、机上の空論を極力排し不言実行ではなく有言実行であった。役に立つ実践教育である私塾は、学びたい人で溢れたそうである。

当時小学生だった絶子氏の子息の信造氏は、生徒が増え自分の遊び場がだんだん少なくなり残念に思ったことがあったそうである。しかし、様々な家庭事情のある人たちが真面目に「学ぼう」とする心意気を、子どもながら感じ取ったと言う。

生徒の中には足腰の不自由な娘さんがいて、母親がリヤカーに乗せて連れて来ていたという。絶子氏はその娘に将来手仕事で生計を立てられるように、自身のできる限りのことを仕込んだそうである。

絶子氏は「生徒一人一人のそれぞれの出来る限りの可能性を引き伸ばすのが教育である」と、コタカや他の大妻の先生方から学んだことを力を込めて、誇らしげに何度も子息に話したそうである。

3-1-1 (10) コタカの教えに従い

絶子氏は、昭和22年、当時小学校5年生であった二女を秋の運動会の晩に原因不明の急性の病で亡くしている。

悲痛に暮れコタカに娘の死を手紙すると「それはお気の毒なことだ。天国に逝ったお子さんのこ

とをいつまでも悔やんでも、惜しんではいけない。往生しようとしても、し切れないお子さんがある。早く成仏するように拝むことよ。お墓参りしたら、一口思いを語りあげなさい。早く成仏するように拝むことね」と返事があり、まだ小学校1年生だった信造氏は、この手紙を母の絶子氏の力を借りて読んだという。

絶子氏は春秋の彼岸、お盆、節季の墓参りに子息の信造氏を連れて参ったという。亡姉の墓石の前の絶子氏は、一時間近く涙また涙で拝んだという。5~6年続き、その後やっと亡姉のことを冷静になれた母の姿を見て、子息の信造氏は子ども心に、亡姉が本当に成仏したと思ったそうである。

絶子氏は大妻を卒業する頃、コタカから「親しい友だちの親がなくなった時や、親戚の人の訃報が入ってその葬儀に参列できない場合は、その人が眠られる方向を確かめて手を合わせてご冥福を祈ってあげてね。就職するとなかなか葬儀などには参列できなくなるからね。」と教えられたそうである。

また、絶子氏はコタカが夫没後、諡（おくりな）を書いた紙をいつも身に付け「いつも側に主人が居て応援してくれて、いつも一緒だと思うと物事に動じなくなる」と言われ自らも実践し、絶子氏の夫没後に夫の戒名を書いた紙を身につけていたという。絶子氏は常にコタカの教えに従っている。

3-1-1 (11) コタカの講演会

絶子氏は地域の人に推され、断り切れず婦人会長になったことがあったそうである。当時会員は70人くらいあり、隣町の甲山町出身の教育であるコタカを呼んで講演会を開催することになったという。昭和32年のことである。

コタカは戦後「多くの学校の校長でありながら、あらゆる婦人団体に相当な役割を持った」ために公職追放となったが、昭和27年5月に追放解除となり、その年に隣町の甲山町（現在の世羅町）に再開された町立の高等技芸学校の校長に就任していた。そしてコタカは、昭和29年には教育功労者として藍綬褒章を受章していた。

絶子氏は婦人会の会長として講演会の司会を務めたが、コタカは講演時間の半分以上を費やし絶子氏が大妻学校の稀にみる模範生であったことなど、絶子氏にまつわる褒め言葉を朗々と述べたという。絶子氏は主催者のトップとして自分のことを述べられ、困惑したそうである。

演題「女性はいかに生きべきか、女性の力は大きい」は聴衆の心を奪い、みなが奮い立つような姿勢となったという。講演後、聴衆であった母親たちは自宅に帰り家族に日本を代表する教育者であるコタカの講演のことを話したそうである。

信造氏は、翌日、翌々日になっても男女を問わず学校の友だちが、「岡田君のお母さんは偉かったそうだね」とか、「岡田君のお母さんがずっと東京にいたら、僕らは友達になっていなかったね」とか話しかけてきたそうである。

絶子氏が東京の大妻学校で学んだことは、村の人は皆知っていたそうである。この当時の婦人会の人たちの殆どが地元の学校を終えただけで、上の学校に進んだ人たちも戦争のために卒業に至れなかったそうである。そのような環境下で絶子氏は、講演時間の半分も使いコタカが自分を褒めたことを後々まで気にして、外に出ることが出来ない日が続いたそうである。

信造氏は、はにかみ屋で物事を慎重に考える母のこの時の心情を理解できたという。絶子氏の夫は、コタカは事実のことを話されて絶子氏に対し特別な思いがあったのではと話し、かつての教え子が東京にいる大教育者をこのような田舎に招いたのは、大仕事だったと絶子氏を讃えたという。

コタカの講演後、村の役場には女性管理職も出て、企業にも女性管理者が出て、女性議員も誕生したと聞いたそうである。

絶子氏はコタカから直接教えを受け、多くの人との出会いながら、コタカの教えを一つ一つ肝に銘じて生き、大勢の教え子に大妻精神を継承した人であった。



左は昭和32年、前列左から2人目が絶子氏、後列左から2人目がコタカ。

3-1-2 松坂 都氏

対象者：松坂 都（旧姓大馬）

卒業校：大妻技芸学校高等家政科

在学年：昭和16~18年

調査日：令和2年11月30日

聞き取り対象者：松坂晃太郎氏（松坂都氏の孫）
松坂都氏（以下都氏）は戦時中に広島県から上

京し、大妻で学び、卒業後郷里で結婚、夫と紡績業を創業し、従業員教育に大妻コタカの目指した教育を実践した。

事業は経済の発展に応じて事業転換を迫られたが、現在も都氏の孫がコタカの目指した教育を継承して社員教育を重視した会社経営を行っている。

ここでは、都氏の孫松坂晃太郎氏からの聞き取りと松坂家に残された資料を基に、現在も継承されている社員教育のなかの大妻教育、大妻精神の姿を次に示す。

3-1-2 (1) コタカとの出会い

都氏は、コタカの故郷広島県世羅郡の隣、広島県府中市の女学校に学んだ。コタカが故郷世羅郡甲山町（現在の世羅町）で講演をしたことをきっかけに大妻で学んでいる。

講演会で都氏を見かけたコタカが、都氏に東京の大妻への進学を勧めたという。



写真は昭和15年、広島県内でのコタカの講演会時の写真であるが、コタカの講演会には大勢の聴衆が集まっていたことが分かる。

都氏の大妻在学期間は、昭和16～18年の戦時中であった。都氏の思い出に、入学時は和装の袴だったが、卒業時はスーツだったとあり、卒業する頃には戦況がだんだん悪くなり、統制服であったことを示唆している。

3-1-2 (2) 紡績会社創業

都氏は卒業後地元に戻り19歳で結婚。夫は義父が経営する松坂報国紡績会社に勤務する技術者であった。

結婚後、都氏は子どもを年子で授かった。その頃の日本は戦局が悪化し、昭和19年8月に学徒勤労令・女子挺身隊勤労令が公布され、未婚の女性は工場などでの勤労働員が義務づけられた時であった。

都氏の未婚の友達たちは、挺身隊として義父が経営する紡績工場へ大勢勤めに来るようになった。その友達たちが勤務途中、都氏は丁度子どものオシメを洗っており「ミヤちゃんまたオシメを洗っているのか」と揶揄され、笑われ、心で泣いたという。

「情けない、こんな事をしてはならない」子育てに従事する家庭の主婦という立場だけの自分に対し、情けなく思ったという。大妻の教えに従い勤労を通して報恩感謝すること、自立しないと！と都氏は奮い立ち、夫に「偉い人になりたんだよったら家を出よう」と都氏が夫と連れて実家を出たという。

独立後さまざまに働き苦労を重ね、昭和23年松菱無線を立ち上げ、技術者の夫がラジオを組み立ててラジオの製作販売を行った。当時は戦後でラジオの需給が高く、都氏の住む広島県府中市は古くから家具産業で栄えた地で、ラジオの外側の箱を作る材料を手に入れることができたのである。

昭和24年には、広島県福山市に空襲で焼けた紡績機を無償で譲り受け、修理し組み立て「広島紡績株式会社」を創業したという。紡績というのは綿から糸をくるくる棒に巻きつけ、その棒の数の単位を「錘」というが、最初の工場は、二千錘、紡績機5台の小さい工場だったそうである。

3-1-2 (3) 女性労働者の募集事業

広島紡績株式会社を創業した頃の従業員は30人～40人であった。

紡績には人が必要であった。求人には苦心し、求人のためにアイデアを絞り出し、昭和30年代ではまだ高価で珍しかったビデオカメラを使い、会社のある広島県府中市の賑わう町の様子や社員寮などを動画で撮影し、会社案内を制作したという。



そして、当時ではまだ乗る人も少なかった自動車それも外車で、あちこち地方へ出向き、動画上映の上、会社説明会を開催したという。

文部科学省の資料によると、現在では高等学校等進学率は全員進学に近い98.8%であるが、昭和30年代の高等学校進学率は45%、女子のみの高等学校進学率は40%程度であった。また、地域による進学率の違いも大きく、東北と九州の高等学校進学率は低い時代であった。



都氏の思い出に九州まで自動車で行ったことが記されている。

写真は工場内。

創業した広島紡績株式会社は、昭和 32 年に大日本紡績（現在のユニチカ）と提携して合繊部門に



進出し事業を拡大し、昭和 30 年代半ばには従業員も 300 人以上の規模を誇るまでになっている。そして、昭和 45 年には社名をヒロボー株式会社と改称している。写真は入社式。

進出し事業を拡大し、昭和 30 年代半ばには従業員も 300 人以上の規模を誇るまでになっている。そして、昭和 45 年には社名をヒロボー株式会社と改称している。写真は入社式。

3-1-2 (4) 都先生

苦心して集めた社員の多くは義務教育である中学校を終えたばかりで、全員が敷地内にある社員寮での共同生活であった。紡績会社の経営者として、女子社員の品性の陶冶、徳性の涵養、マナー教育は、日本の紡績産業の歴史を顧みた時に必要で、むしろ当然のことであった。

人材こそが会社の資産であると考えていた都氏夫妻は「働きながら普通の教育」「結婚に備えた花嫁修業」が出来るように、各様準備を施し、広島



県庁に何度も足を運び、昭和 37 年会社内に国公認定時制高等学校の開設に至った。左の写真は開学時の校舎である。

公認の定時制高等学校のため普通定時制高等学校では 4 年制のところ 5 年制であった。



左の写真は定時制高等学校卒業の日に高等学校の認定証を手にする卒業生である。

右上の写真は、定時制高等学校の座学の授業の一コマである。その下の写真は、調理実習の様子で、中央の白い割烹着姿が都氏である。都氏も授業を担当し、社員でもある生徒たちから「都先生」と呼ばれるようになった。



都氏は大妻で学んだように、机上の空論を

極力排し、実践させる大妻教育を広島県府中市で行ったのである。

次の写真 2 枚は、定時制高等学校昭和 40 年度の文化祭展示の写真である。写真から、当時の授業の充実ぶりが分かる。



3-1-2 (5) コタカとの交流

都氏が広島県府中市の自社で定時制高校を開設する 10 年前の昭和 27 年、府中市の隣である広島県世羅郡甲山町に長年休校していた甲山町の女学校が、甲山町立高等技芸学校（後の大妻女子専門学校）として復活し、コタカは町に請われて校長を務めることになった。

実際の校長は、校長代理として大妻の卒業生である磯崎睦氏が担当し、コタカは年に数回学校に顔を出す程度であったが、郷里に帰る回数は増えている。

一般財団法人大妻コタカ記念会収蔵の写真から、昭和 30~40 年代、コタカの故郷での講演会やコタカを囲む大妻の同窓会が頻りに開催されていることが分かる。

次の写真は昭和 28 年に福山市で開催された同窓会で、前列左から 4 人目にコタカ、左端に都氏の姿がある。



前頁下の写真は昭和31年に都氏宅で開催された同窓会での一枚である。前列左から3人目にコタカ、その左隣が都氏である。

この頃（昭和31年）、都氏の会社は業績をのばし紡績工場は、一万錘を達成していた。

一方、昭和27年に開校した甲山町立高等技芸学校は、町立中学校の一棟を借りて実施していたが、当時の世の中の求めに即した甲山町での大妻教育は順調に発展し、借物の校舎では狭くなり、独立した校舎の建築に迫られるようになっていた。

当時参議院議員だった宮澤喜一氏や在京広島出身の知名人の愛郷心に訴え、コタカは自ら建築資金の寄付のお願いに歩いて廻り、当時の池田勇人総理大臣をはじめ大勢の人びとの協賛を得て、昭和33年秋に新校舎は落成し、学校はますます発展をした。

次の写真は、昭和33年秋の甲山町高等技芸学校校舎落成記念の写真である。コタカ校長を中心に当時の町長、宮沢議員らと一緒に後列右端に都氏の姿がある。この写真から都氏が、コタカのこの事業に大きな力を貸したことが分かる。



平成30年の世羅郡世羅町での調査時に、地元世羅町の方が「府中市の松坂都氏はコタカへ支援をした人である」と当該研究において教えられたことである。

新校舎が落成した頃、コタカが心の拠り所として愛していた生まれ故郷の村は、ダム建築のために水没している。そして同時期に故郷に暮らしていた姪を急病で亡くしていた。亡き姪の家族は伊尾へ引っ越し、ダム湖畔に移築された生家には住む人は居なかった。



コタカは、郷里に帰った時のために上下町矢野に別荘を建てた（左写真）。当時矢野は温泉地として栄えていた場所であったが、別荘

では食事を用意してくれる人がなく、コタカは時々都氏宅に泊まるようになったという。



左は昭和39年に都氏の会社で開催されたコタカの講演会の一コマである。



都氏はコタカから「自分は字が下手だから、字だけは習いなさいよ」と言われたそうであるが、コタカは都氏のために上の書を揮毫してくれたという。コタカの都氏への感謝の印であったのだろう。

なおこの揮毫書は、松坂家から世羅町を經由して大妻学院に寄贈されている。

3-1-2 (6) みやこスクール

都氏は、中学校卒業の社員の為に定時制高校を開設し、高等学校卒業資格を得る道を拓いたが、その他に都氏の名前を冠にした「みやこスクール」を開設している。

「みやこスクール」は、寮生活をおくる社員の余暇時間を使い、学びにより知識を磨き、福利の増進を目指したスクールであった。都氏夫妻の「人材こそ会社の資産」という考えのもと、会社を出た後も立派な社会人に、婦人としての成長を願って実施されていたのである。



開設されていた講座の詳細を示す資料等はないが、残された写真から「みやこスクール」では書道、茶道、あるいは華道といった文化的活動が行われていたことがわかった。



また、資格を得ることの出来る講座も設けられていた。



左の写真は「家庭用編み機」の講座の様子である。昭和30～40年代家庭用編み機の技術を身に付けると、将

来の福利をもたらし、実生活に応用できたのである。つまり「家庭用編み機」の指導者として教室を開くライセンスが得られたのである。



左は「みやこスクール」入学式の写真で、大勢の社員が入学して

いたことが分かる。

さらに会社には「みやこスクール」による文化的活動の他に、社員の福利厚生の一環としてのスポーツ活動があり、都氏は「女子ソフトボールチーム」の全国大会の試合のために、九州から東北まで日本中を連れて歩いたそうである。昭和45年には日本リーグで日本一



になっている。

3-1-2 (7) 継承された精神

昭和46年になると、1ドル360円という固定相場場の終わりを告げたニクソンショックがあり、東南アジア各国で生産する安価な繊維製品が台頭し、日本の繊維産業は深刻な打撃を受ける。オイルショックもありピンチに次ぐピンチに見舞われ、都氏の会社の経営環境は厳しくなっていた。

その後「ヒロボー株式会社」は、都氏の子息の代になり、紡績に従事した社員を解雇することなく、10年の歳月をかけて事業転換を成し遂げている。

倒産の危機を乗り越えて事業転換した様子は、「再生の息吹を聞け 町工場復活のヘリコプター」と題し、NHKのTV番組「プロジェクトX 挑戦者たち」で紹介され、人材こそ会社の最大の資産という都氏夫妻の考えを子息が引き継いでいたことがわかる。



現在は、前社長である都氏子息の急逝後、孫の松坂晃太郎氏（写真左）が社長となり、コミュニケーションを大切にしながら「社員個々の人材を育てる」ことを重視

した企業経営をしている。

現社長の晃太郎氏は、祖母である都氏が「みやこスクール」を開設したことに倣い、社員の余暇時間を使い、学びによる知識磨き、生涯にわたる心身両面の健康保持増進のためのアクティビティなどをクラブ活動と称して実践している。

現在のクラブ活動数は18であり、柔道・夕礼・ヒロボーの歴史・アプリ作成・半自動溶接セミナー・資産登録から抹消手続きの考え方・菜園クラブ・危機予知トレーニング他が活動をしている。

次の写真は、柔道クラブの様子である。



地方で企業するヒロボー株式会社には、高等学校を卒業し入社する人が多く、「入社した社員が会社を出た後、ヒロボー株式会社を中途退職したとしても、立派な社会人として成長してほしい」と晃太郎氏は考えている。

なお、都氏は社会貢献に対し昭和59年に藍綬褒章、平成5年には旭日双光章を受賞している。

3-1-3 茅野壽義（ちのすぎ）氏

対象者：茅野壽義（旧姓岩下）

卒業校：大妻技芸学校高等技芸科・研究科

在学年：昭和3～6年

調査日：平成29年11月27日

聞き取り対象者：茅野愛子氏（茅野壽義氏の長女）

茅野壽義氏（以下壽義氏）は、昭和初期に長野県から上京し、大妻で学び、卒業後長野県岡谷市の小学校に勤務。結婚後は、茅野市の初代連合婦人会長やPTA副会長などを歴任し、地域のリーダーとして社会貢献をしている。

この章では、壽義氏の長女である愛子氏からの聞き取りと茅野家に残る資料及び大妻の資料などから、壽義氏が大妻の発展に寄与した様子と卒業

後の社会貢献、またコタカとの親交について記していく。

3-1-3 (1) 大妻への進学

壽義氏は、長野県茅野市豊平（諏訪湖湖東）で農家である岩下家の三女として明治41年に生まれ、大正10年3月に豊平尋常高等小学校を卒業。全頁の写真は尋常高等小学校卒業時の写真で、前2列目右から3人目が壽義氏である。



壽義氏は尋常高等小学校卒業後、教員である姉の住む松本に下宿し、長野県立松本高等女学校（現在の長野県立松本蟻ヶ崎高等学校）で学んでいる。

他の聞き取り調査で収集した資料の中に、昭和34年に壽義氏の実家がある諏訪湖湖東地区の高等女学校の家庭科教師として赴任した卒業生の手記があり、そこには昭和30年代でもこの地域は小学校を出ると農業を手伝うか就職するかで、女学校に行くことや電車に乗るのは贅沢なことと言われ、女学校に通う生徒たちは田畑で働く人たちから白い目で見られ、石ころだらけの山道を下駄ばきで往復3~4時間かけて通い、厳冬の時期は通いきれず下宿する生徒もあったと記されてあった。

壽義氏が高等女学校に進んだのは大正時代のこと、姉も既に教員として勤務していることから、壽義氏の実家はこの地域の有力者であったのではないかと推察する。

一般財団法人大妻コタカ記念会に残る資料によると、壽義氏は昭和5年3月に大妻技芸学校高等技芸科二部を卒業し、更に研究科へ進み、昭和6年大妻技芸学校高等技芸科研究科二部を卒業している。

大妻進学のきっかけは、壽義氏の長女愛子氏への聞き取り調査から、コタカが長野県立松本高等女学校に「卒業生を給費生として大妻に推薦してほしい」と依頼があり、学校推薦で大妻に進学していることが分かった。

3-1-3 (2) 教員無試験検定資格

壽義氏が大妻に入学した頃の大妻技芸学校は、大正15年に高等技芸科に加えて高等家政科を増設し、学則を改正し認可を受け本科の中に専門学

校と同程度で家事科・裁縫科の中等教員の養成を目的とした高等技芸科と高等家政科二科を擁する学校に発展していた。

壽義氏が高等技芸科在学中の昭和3年1月、大妻技芸学校高等技芸科卒業生に対し、中等教員裁縫科の無試験検定が認可された。このことは大妻の歴史にとって極めて快挙であり、大妻の発展につながる大きな一歩であった。

この快挙について昭和3年1月10日刊行の『大妻時報』第2巻第1号の「ふる里だより」には次のように記されている。「1月21日附を以て、高等技芸科は裁縫科中等教員無試験検定を許可されました。この3月同科を卒業される方々は、皆有資格者となれます。母校の喜びを、皆様も一緒にお喜び下さいませ。」とある。

続けて昭和3年3月6日刊行の『大妻時報』第2巻第3号の「校報及び校内記事」には、「技芸学校高等技芸科卒業生に対し、裁縫科教員資格の交付あらんことは、本校多年の宿題なりしも、当局者に於いては卒業生の実力及学校の施設につき適当なりと認め、1月21日付を以て無試験検定の資格を付与せられしは、洵に全校慶賀に堪えざる所、我等は此榮譽に対し更に一段の責任を加えたるを感じ、益々奮励努力せんと欲す。」と紹介されている。

また、同年同号の『大妻時報』「ふる里だより」には、高技無試験検定認可祝賀宴と題し、校主及校長以下現職82名、旧職員30名で祝賀宴が開催され、校主はこんなに嬉しいことはない、校長は感無量の面持ちであったとあり、先生方の挨拶では、コタカ校長の努力と犠牲の克己との賜物であると力説された、と記されている。

「中等教員無試験検定資格制度」とは、筆記、口頭、実技等の教員資格試験を受けることなく、その資格付与の認定を受けた学校の課程を修了することで、師範学校・中学校・高等女学校の教員資格を取得できる制度であった。当時、私立学校として「中等教員無試験検定」付与の認定を受けたことは高等教育機関として公に承認されたことを意味していたそうである。認定を得ることで、学校の威信の保持が出来たわけである。

さらに、壽義氏在学中の昭和5年10月には、小学校教員資格についても無試験検定の扱いが認められ、大妻技芸学校高等技芸科および高等家政科の卒業生に対し、小学校裁縫本科正教員免許状の無試験検定が認可された。

その後昭和 10 年までの間、各科の無試験検定認可を得て、昭和 10 年 6 月 6 日に高等家政科に中等教員家事科免許の無試験検定認可を得るに至るまでの間、コタカの情熱と学校の犠牲がはらわれたのである。



左の写真は高等家政科に中等教員家事科免許

の無試験検定認可で喜ぶ生徒たち。

「教員無試験検定資格認可」を得るために、コタカは東京内あるいは地方へ行き県立から推薦された生徒を集め、教員無試験検定資格認定に向けての準備をしたという。残念ながら「誰が」教員無試験検定資格認可のために集められた生徒であったかの記録はないが、壽義氏が高等技芸科の教員無試験検定資格認可を得るために、長野県立松本高等女学校から選ばれて大妻に入学した一人であったに違いないであろう。

3-1-3 (3) 大妻を卒業後の社会貢献

壽義氏は昭和 6 年に大妻技芸学校高等技芸科・研究科を卒業し、小学校裁縫本科正教員として長野県岡谷市小井川小学校に勤め、結婚後も 30 歳まで教員をしたという。

昭和 30 年代には、茅野市連合婦人会の初代会長として、1 町 8 ヶ村という広域婦人会をまとめるリーダーとして地域貢献をしている。

茅野市の各町婦人会をまとめるために「講演会」の開催を考えて実施している。当時はまだテレビのある家庭は少なく、ラジオの時代で、中央の先生方の話を聞く機会は稀なことで、人の集まるイベントを開催しそれぞれに役割を担当し、婦人会員をまとめることを考えている。

壽義氏は、斎藤栄三郎氏、村岡花子氏、金原省吾氏そしてコタカに交渉して講演会を開催したという。

3-1-3 (3) 大妻を卒業後の社会貢献

壽義氏は昭和 6 年に大妻技芸学校高等技芸科・研究科を卒業し、小学校裁縫本科正教員として長野県岡谷市小井川小学校に勤め、結婚後も 30 歳まで教員をしたという。

昭和 30 年代には、茅野市連合婦人会の初代会長として、1 町 8 ヶ村という広域婦人会をまとめるリーダーとして地域貢献をしている。

茅野市の各町婦人会をまとめるために「講演会」の開催を考えて実施している。当時はまだテレビのある家庭は少なく、ラジオの時代で、中央の先生方の話を聞く機会は稀なことで、人の集まるイベントを開催しそれぞれに役割を担当し、婦人会員をまとめることを考えている。

壽義氏は、斎藤栄三郎氏、村岡花子氏、金原省吾氏そしてコタカに交渉して講演会を開催したという。



写真は昭和 32 年 3 月 21 日に茅野会館で開催されたコタカ講演のようすである。

毎回会場は満員で、広い会場を見つけるために、寒い学校の体育館で開催した



こともあったそうである。左上の写真から満員の会場の様子が分かる。

左下の写真は、泉野・玉川地区の



婦人会員の前で話をする壽義氏である。

社会で活躍する卒業生の壽義氏の姿をコタカは嬉しく思ったに違

いない。

3-1-3 (4) コタカとの交流

下の写真は、一般財団法人大妻コタカ記念会が収蔵する一枚である。写真の詳細に左から旧岩下壽義・土肥・大妻・弘・諏方キマと記されている。



聞き取り調査によりこの写真壽義氏の隣の女の子は長女の愛子氏、中央の男性は壽義氏の夫の茅野光英(みつふさ)氏で、職業が諏訪大社上社前宮の神職であることが判明した。壽義氏は諏訪大社上社前宮の神職の家である茅野家に嫁いでいたのである。

これまでの大妻家の調査で、大妻の祖先は長野県にある諏訪神社の大祝(おおほうり)の末裔で、神氏系図のなかに大妻の祖先の名前がみられることが分かっており、大妻家は「大祝諏方(おおほうりすわ)家」と親戚づきあいをしていたこと示してきた。この調査で、諏訪大社上社前宮の神職である茅野家と諏訪神社の大祝諏方家が親戚関係にあるのを知り、コタカが茅野家とも親しくしていたことを知るに至った。

次の写真は、昭和 26 年 11 月 11 日長野県の諏訪



大社鳥居前の写真で一枚で、前列中央にコタカ、そして大祝諏方家と茅野家の家族が共に写っている。

壽義氏の長女愛子氏によると、コタカは度々茅野家に宿泊したとの事でコタカとの交流の

深さを物語っている。

下の写真は、昭和33年11月大妻学院創立50周年祝賀記念時に校舎内で撮影されたものである。中央のコタカの左後方白い羽織姿が壽義氏である。



3-1-4 齋藤幸子氏

対象者：齋藤幸子（旧姓齋藤）

卒業校：大妻女子専門学校技芸科

在学年：昭和18～20年

調査日：平成29年4月6日

聞き取り対象者：齋藤幸子氏（本人）

齋藤幸子氏（以下齋藤氏）は、戦時中の昭和18年4月大妻女子専門学校に福島県から上京し入学、戦時中のため学徒動員で長野県まで派遣され、派遣先で終戦を迎え、昭和20年9月に繰り上げ卒業している。卒業後は、家事手伝いの後主婦専業として婦人会のリーダーとして活躍をした。

この章では、齋藤氏からの聞き取り調査と齋藤氏の資料を参照に、戦時中の大妻での学びと大妻

の卒業生として地域貢献をした姿を記していく。

3-1-4 (1) 大妻女子専門学校への進学

齋藤氏は、大正14年福島県伊達郡川俣町の絹織物の商家に生まれ、小学校5年生から猛勉強の末に当時福島県で唯一だった県立の福島高等女学校へ進学し、寮生活をしながら勉学に励んだが、病気の為1年休学したそうである。

卒業後は、自律を目指し、理数科が好きで医学進学を考えていたが、両親が女は将来嫁ぐ身だから家庭生活に役立つよう良妻賢母育成の学校へと、昭和18年4月教員免許証を取ることのできる大妻女子専門学校技芸科へ進学したとのことである。

当時、福島県立高等女学校には5クラスあったが、東京に出た人は1人か2人だったそうである。

大妻女子専門学校技芸科への入学方法は、高等女学校の成績、内申書による学校長による推薦入試であったという。

齋藤氏は、自分の世代は小学校1年生の昭和6年に満州事変が起こり、小学校6年生の時に勃発した支那事変は昭和12年夏と戦争とともに勉学時代を過ごしたのだという。寄宿生活中の女学校3年生二学期、期末試験中の早朝に、軍艦マーチに乗ってラジオから臨時ニュースが流れ、真珠湾攻撃の大成功と「米英と開戦状態に入れり」の大本営発表の報道を聞き、日本の戦勝を単純に学友と喜んだという。昭和16年12月8日のことである。

外地での戦いは皇軍による聖戦であるという教育を受けて成長した世代で、昭和18年4月に福島から上京し大妻で学ぶに際し、日本の戦局に暗雲が立ち込めていることなど意に介さなかったという。

3-1-4 (2) 大妻女子専門学校での学び

大妻女子専門学校技芸科での授業は和裁、洋裁、刺繍とそれぞれの授業で出される宿題が多く、寄宿舎の消灯時間後も廊下の豆電球の薄暗い灯りの下で、不得手さを嘆きながら悪戦苦闘して夜を過ごすことが度々あったという。

食糧事情は米配給制度の時代であったため、寮生活での食事は、ごはんの量を増やすために雑穀や野菜などを混ぜて炊く「かてめし」で、美味しいものではなかったそうだが、それぞれの寮生が親元から送られてきた生活物資を分けあっていたという。齋藤氏の父親は、食糧などの生活物資を

リュックに詰めて、6～7時間汽車に揺られ福島から上京し届けてくれたそうである。調理実習も、学生がそれぞれに持ち寄ったものを教材にしていたそうである。

戦時色が濃い中でも、若者には東京は魅力的であったのだろう。日曜日には銀座や新宿に遊びに行ったという。

写真は大妻の校舎屋上での大妻女子専門学校生。



3-1-4 (3) 学徒動員の日々

昭和18年秋、戦局は日ごとに悪化し、兵員の不足から徴兵免除猶予が停止となった文科系学生たちが戦場に駆り出されることになった。



左の写真は昭和18年、校舎中庭で撮られた写真で、コタカもモンペ姿である。

昭和18年10月21日、小雨降る明治神宮外苑競技場（後の国立競技場）で学徒出陣壮行会が開催され、見送りの女学生の中に大妻生もあり、その一人に斎藤氏もあったという。

昭和19年になると学校において正常の授業を続けていくことが次第に困難になり、斎藤氏は昭和19年9月から3カ月、蒲田の東京計器株式会社へ事務職として学徒動員として勤務したという。寄宿舎から防空服、防空頭巾に身を固め、戦災や強制取り壊しで人家が少なくなった市街地を通り、空襲を避けながら通勤したという。この頃より、連夜の空襲警報で衣服を着たまま就寝する日が続いたそうである。

その後、斎藤氏は大妻の校舎内を軍需工場とする学校工場「偕行社軍服廠」で、陸軍将校服上下の縫製作業に従事している。大妻の校舎内には、偕行社軍服廠の他に横河電機、住友電工、沖電気、日産自動車などの工場が置かれていた。

「偕行社軍服廠」での陸軍将校服上下の縫製は、本職の仕立職人による指導で、流れ作業ではなく、一人ですべてを仕上げたという。仕立職人から学ぶ縫製は、しつけ糸の代わりに大和のりで貼り付け、裏地表地の弛み加減や控え分はすべて手の感触で行うなど、授業での学びとは違うプロの技術

を修得することが出来たという。

しかし、昭和20年3月9日と10日の東京大空襲で、大妻は校舎3階以上が焼失し、校内工場も焼け、4月から第一海軍衣糧廠のある長野県立伊那高等女学校内の学校工場に疎開し、40名の大妻生と共に従事したという。

長野県立伊那高等女学校の教室に畳を敷いての寮生活で、縫服作業や肥桶を担いでの農作業など北アルプスのふもとで日本の戦勝を信じながら従事し、伊那で8月15日終戦を迎えたという。

次の写真は昭和20年4月「第一海軍衣糧廠」学校工場が置かれた伊那高等女学校での一枚である。



昭和20年9月戦時下特例で繰り上げ卒業となり、3年の修業期間を2年半に繰り上げられ、大妻生としての学生時代は終了したそうである。進学する人が少ない時代に、学問以上に得難い体験をできたことは人生の宝だと語っている。



左は平成6年学徒動員で従事した伊那高等女学校（現在の県立伊那弥生が丘高等学校）を訪問した時の写真。赤い服が斎藤氏。

3-1-4 (4) 専業主婦として

斎藤氏は大妻女子専門学校を卒業後、家事手伝いを経て昭和25年に結婚。戦後の復興もまだ進まない時代で、布地も少ない中ご主人の通勤上下服の仕立、子どもにはジャージ素材からリフォームした通気性の良いおむつかバーを作り、洗濯の度に防水液を作って浸し、おむつかぶれに気遣う等の工夫をしたという。

大妻女子専門学校技芸科へ進み、夜なべをして宿題に取り組んだ大妻での教育と、戦時下の勤勞奉仕として「偕行社軍服廠」での仕立職人によるプロの指導は、斎藤氏の結婚後の人生を豊かにし

ている。ホームソーイングで娘のために中学校、高等学校の制服をはじめ大学生になっても洋服を作り、ウエディングドレスも作ったという。

3-1-4 (5) 婦人会で社会貢献

38歳の時に友人に誘われて婦人会の活動に参加を始めたという。

昭和51年に「かしこい消費者」を目指そうと、川俣町消費生活研究会を主婦38人で結成し、会長に就任している。

「かしこい消費者」を目指そうとしたのは、戦後の日本経済の復興は目覚ましく、専業主婦として高度経済成長期の「お客様は神様です」の言葉に惑わされて「はだかの王様」にならないように、身近な暮らしの課題を学習しながら多様化する時代に対応できるスキルを身に付ける必要があると考えたことによるのだそう。

飽食の時代になり、成人病や肥満が問題視され、家族の健康管理者の主婦として「健康のための安全でバランスの良い食生活」をスローガンに掲げて、食品添加物やポストハーベスト（収穫後使われる農薬）の問題について勉強会を開催し、仲間たちと産直や手作り食品の情報交換に努め、消費生活の学習を続けたという。

昭和54年には「植物油」をテーマに取り上げ安売りの謎、酸化は使用何回から始まるのかなど実証実験も行ったのだという。「食物油」の学習は、平成元年に河川の水質調査を実施して「植物油と環境問題」の取り組み学習に繋がっていったという。

個々に関する課題から始まって地域、県、国と関連した課題までを婦人会の仲間と共に組織力で取り組んでだそう。生涯学習を通じ、地域づくりに貢献する姿がある。

川俣町消費生活研究会会長に就任したのをきっかけに、川俣町女性団体連絡協議会会長に就任し、堅い信頼で結ばれた仲間たちと嫁不足解消に向けた若者定住促進事業を企画し、その活動は県内の男女共同参画社会の取り組みの先駆けとなったという。

その後、福島県連合会評議員を経て、福島県婦人団体連合会会長に就いている。自身の戦争体験から県婦人連合会で平和への願いを込めた「中国養父母への感謝募金」を昭和62年から、「平和のつどい」を平成元年から開催したそうである。

専業主婦として婦人会の要職に就いた斎藤氏で

あるが、大妻女子専門学校を卒業したということが後押しになっていたという。戦前戦後を通して大妻コタカの社会での活躍を知る人たちにとって、コタカも大妻学院も知られた学校であった。

斎藤幸子氏の社会貢献に対し、平成9年11月社会教育功労者文部大臣表彰、平成26年11月には旭日双光章を受賞している。

3-2 章 動画公開後について。

以下の5件での動画上映・活用等について示す。

3-2-1 甲山中学校

動画を収録したCDを、広島県世羅郡世羅町立甲山中学校に送付。CD動画は中学1年生の授業「総合的学習の時間」の教材に活用され、令和2



年11月の文化発表会で朗読劇「教えの道を一筋に一大妻コタカも物語」の発表につながった。

写真は文化発表会朗読劇「教えの道を一筋に大妻コタカも物語」の一コマ。

3-2-2 大妻地方同窓会

動画を収録したCDを、各大妻地方同窓会に送付。各地方同窓会で作成する会報に、動画内容について掲載があり、「コタカが自分たちも知る歴史に名を残す偉人と交流があったこと初めて知り、女性リーダーの草分け的存在だったコタカのことを誇らしく思う」とコメントが記され、二次的に活用され継承につながった。

3-2-3 世羅町自治会

動画を収録したCDを、広島県世羅郡世羅町の各自治会13か所に配布。地元世羅町出身の偉人コタカについて学ぶ資料となったと各自治会に歓迎をされた。

3-2-4 大妻コタカ生家

広島県世羅郡世羅町のコタカ生家にモニターと動画再生器が設置され、生家での視聴環境が整った。

生家で営業している「ごもくめし」に令和2年9月、10月、11月の各月それぞれ数回、旅行会社企画の団体客があり、訪問時に動画を上映。大妻学院やコタカについて事前情報にない方々に大妻学院、コタカの生涯、大妻精神を知っていただくきっかけを作った。

3-2-5 その他

動画2本はYouTubeにアップし、限定公開後、

一般公開にした。

効果として、大妻女子大学について、教育ジャーナリストの中山まち子氏による記事がWebサイトのアーバンライフメトロとヤフーニュースに『校訓は「恥を知れ」 広島育ちの女性が一代で作った「大妻女子大学」とはどのような大学なのか』令和2年11月27日 17:30 配信

<https://urbanlife.tokyo/post/47255/>

<https://news.yahoo.co.jp/articles/90dcf70940dfe04c626162ac7a54a57c716384d2> として取り上げられた。

4. 考察

2-1 章「聞き取り調査等の実施」

大正時代末期から昭和初期に給費生として大妻で学んだ岡田絶子氏（旧姓山口）は、コタカの夫である大妻良馬が存命中で、昭和4年に良馬が没した後コタカは良馬が担っていた仕事も引き受け多忙を極めたが、それ以前にコタカの教えを十分に直接受けることができた時代で、コタカの教え吸収し、実践した人であった。

現在のように情報が幾多に溢れ、また情報を得るルーツも多種多様な時代と違い、まっすぐにコタカの教えを、何のブレンドなしに継承した人であった。

絶子氏は大正12年の関東大震災という惨事に遭遇したことにより、避難誘導をするコタカ、復興に尽くすコタカ姿に触れて、より深くコタカの人となりに接することもでき、より濃く大妻精神を体得した人であったといえる。

この調査により、絶子と同時期に給費生であった水野菊枝氏（旧姓今市）、中条しな氏（旧姓加藤）のふたりが判明したが、その方々も未調査ではあるがそれぞれに向学心に燃えて大妻に入学していることから、絶子氏は同窓の給費生からも大いに刺激を受け、切磋琢磨し大妻精神を体得していたことが推察される。同時に、教えるコタカも手ごたえのある生徒を抱え、震災後の復興の中にあつて、大妻教育の発展のために、向上に次ぐ向上を目指していたことであろう。

絶子氏は大正15年3月に大妻技芸学校高等技芸科を卒業後、給費生として卒業したが、教員として大妻の校舎内に住み大妻技芸学校の裁縫科の先生として2年間勤務をしている。

時間軸で人の流れを見ると、絶子氏が大妻技芸の先生として勤務した時代、長野県から茅野壽義氏（旧姓岩下）が給費生として大妻技芸学校高等

技芸科に入学し、互いに大妻で交差していることがわかる。

茅野壽義氏は、コタカが長野県立松本高等女学校に「卒業生を給費生として大妻に推薦してほしい」と依頼後、学校推薦で大妻に進学していることが分かったが、これまでの聞き取り調査で、コタカが自ら高等女学校に出向き広報活動をしていたのは、コタカの故郷である広島県で耳にしたことはあったが、長野県の例は初めてであった。

壽義氏の出身校は長野県立松本高等女学校で、その校名が示すとおり長野県松本市に所在していた。長野県松本市には大妻家の高祖が祀られている大妻神社が鎮座し、コタカは頻繁に出かけていた地であった。そのことから長野県松本市で優秀な生徒を集めるべく広報活動をしていたことも合点がいく。

壽義氏の調査で、壽義氏が高等技芸科に在学中、高等技芸科の生徒たちは、中等教員裁縫科の無試験検定認可を得るために試験検定を受けて実力のほどを示す必要があり、先生方と共に猛勉強をしている。当時裁縫科教員であった絶子氏は、通常の授業の他に、中等教員裁縫科の無試験検定認可のための補講も担っていたであろうと考え、給費生として校内に住む壽義氏と校内に住む裁縫科の先生の絶子氏は大妻の発展のために尽力をした人たちであり、試験検定を受けるための勉強や裁縫の訓練は実力として身につけていたはずである。

コタカは中等教員裁縫科無試験検定認可補講に権威ある先生方を招へいしている。絶子氏は普段は聞くことのできない講義を見聞きして学んだことであろう。

薫陶を受けた絶子氏も壽義氏も実社会に出た後、大妻での学びを実践し、その大妻の教えは社会に認められ、大妻学校の評判を高めていることがわかる。

コタカは大正時代の終わりからラジオ放送に出演し、有名婦人雑誌や新聞の家庭欄に多く執筆をするなどして一般社会にコタカの名も大妻学校も広く知られるようになっていた。大妻学校がさらに発展したのは、卒業生が各所において大妻で学んだ技芸の実力や大妻で会得した大妻精神による人柄が真の評価を得て、大妻学校は評判の高い学校となっていたのである。

コタカは子どものころの体験から一斉授業の弊害を避け、なるべく少人数の生徒を受け持つよう

につとめ、生徒一人一人のそれぞれの出来る限りの可能性を引き伸ばすのが教育であるとする大妻の教授法は好評となり学校は発展した。聞き取り調査から絶子氏も私塾開設後、この教えの通り指導をしている。

大妻教育の裁縫教育、大妻精神は卒業生により各地に伝播し、受け入れられたのである。大妻は、コタカが明治の終わりに私塾を開設したが、その頃の日本は男性が中心として時代が構成され、女子の教育の本分は良妻賢母で、教育においては裁縫手芸が重視された時代であった。その時代の中で大妻学校は、世の中で役に立つ教育を実施してきたといえる。

戦後、女性の社会的地位は飛躍的に向上発展し、コタカの講演会が開かれた地域の役場には、女性管理職が登用されたと聞いた。

教育は各時代の個性や要請に柔軟に対応していかなければならないが、コタカの教えもそこにあり、大妻教育は常に社会に役立つ人材育成を努めている。

昭和27年に広島県世羅郡に大妻の教育を実践する学校が甲山町立甲山高等技芸学校（後の大妻女子専門学校）として復活をし、戦後の時代の中で役立つ教育が進められ、世羅町の町民への聞き取り調査で昭和30年代には、この町立甲山高等技芸学校は県立世羅高等学校生活科よりもレベルが上であったようだ。

このことから、広島県府中市で松坂都氏が昭和37年に開設した定時制高等学校では、甲山町立高等技芸学校で実践されていた大妻教育を参考にしたことだろう。そしてコタカも、大妻の卒業生が開設した学校への支援を惜しまずにしたに違いない。

都氏は、戦時中に結婚し子どもを年子で授かり、挺身隊で働きに出かける同級生を見て、子育てをする主婦だけを生きがいとする人生では情けないと、夫ともに独立している。これこそコタカの「向上の一路」の教えである。

昭和4年11月刊行の同窓会誌『ふる里』に、「向上の一路」と題したコタカの記述がある。以下に一部を示す。

道徳のことに限らず、学問の方でも「私はこれで一通りできたから」とうぬぼれますと、その日からたまたま学問が止まってしまう。多くの女学校を卒業された女性が、卒業を同時に中流婦人として学問が、一通り終わったつもりになられま

すのでやがて尋常小学校の弟や子供から、時代おくれの解らず屋扱いをされる様になるのでございます。日進月歩の学問の世界では止まったら最後、どんどん時代遅れになるのでございます。ここにもまだ仕足らぬという心から、絶えず心の糧を求めていく必要がございます。私は時代遅れでもかまわない。解らず屋でもよろしい、といった、張りも生き甲斐もない婦人ならばとにかく、少しでも、より善く生きて行きたい、人間並の水平線から落ちたくないと願う向上の婦人ならば、夢にも、「これでよい」と満足してはなりません。飽くまでも、仕足りぬ仕足りぬと進んでいかねばなりません。何故なら、向上の一路には終点がありませんから。

都氏の向上の一路は、「みやこスクール」の実践からも見て取れる。「みやこスクール」の取り組みは、コタカが常に強調していた「いつでも何処でも、何からでも学べ」の大妻精神で、生涯学習である。

コタカは、学校を出ると定まった先生による教育はない。学校を出たら実生活の周辺から、心に触れ、目に映るものすべてを心身両面の糧として、生活の智慧を汲みとることに心がけることが必要であると、生涯学習の必要性を強調している。（同窓会誌『ふるさと』20号昭和41年）

都氏がコタカから学んだ大妻教育・大妻精神は、現在も都氏の孫晃太郎氏が受け継ぎ、広島県府中市にあるヒロボー株式会社において継承されている姿をみる。

「社員個々の人材を育てたい」と考える現社長の晃太郎氏の実践はクラブ活動にあり、「生徒一人一人のそれぞれの出来る限りの可能性を引き伸ばすのが教育である」としたコタカの教育・教えに通じるものがある。

広島県府中市で、大妻コタカの教えを受けた卒業生の子孫が大妻精神を継承し、社会に貢献できる製品づくりをするヒロボー株式会社の姿に大妻精神の発展を見ることができる。

調査をした岡田絶子氏、茅野壽義氏、斎藤幸子氏の3名は、婦人会役員として活躍をされている。そのうち絶子氏と壽義氏は、教員経験があるが、斎藤幸子氏については職業経験がなく、主婦を専業とし、主婦専業であることを誇りとしていた。

主婦として戦後の物のない時代には、戦時下の大妻で学んだ技芸技術と軍需工場での軍服縫製体験で得た技術を生かし、ご主人の背広、子供たち

の制服を縫製し、ホームソーイングにより人生を豊かにしている。

大妻女子大学を卒業したというブランド力に後押しをされて斎藤幸子氏は、婦人会の役員に選出され、その後の斎藤氏の活躍は、大妻教育が目指す社会に役立つ人材であったといえる。

斎藤氏は、婦人団体の育成や女性の地位の向上のために「女性の社会参加支援事業」として若者の定住する地域づくりに尽力し、その結果、その事業は県内の男女共同参画社会取り組みの先駆けとなったという。素晴らしいことである。

斎藤氏の活躍は、大妻の教えは社会で実践され評価されていることを証明している。

2-2 章「動画 2 本の制作」

動画 2 本の制作により、多方面での二次的利用がなされ、大妻精神の継承方法を模索するとする目的に近づいたのではないかと考える。

5. 今後の取り組み

本研究は大妻コタカと関わりがあった方々及び大妻コタカの教育を受けた方々から聞き取り調査を行い、その方々がコタカとどのように関わり、どのようなキャリアを積み、大妻精神をどのように継承したかを明らかにして、コタカが教育者として社会に与えてきた影響力を明らかにする事を目的としているが、一人でも多くの方から聞き取り調査をする必要がある。

今回の調査で、時間軸で調査し検証することにより、これまでに示されていなかった大妻の歴史がわかり、大妻での学びが見えてきた。

特に、給費生として大妻で学んだ方々がより深くコタカとかかわり大妻精神を体得していることも分かったので、給費生の調査を始める必要がある。令和2年に大妻コタカ没後50年を迎え、コタカと共に給費生として学ばれた方も高齢となった今、早急に給費生であった方々の調査をする実施する必要がある。

また、動画配信によって影響力のあるメディアに取り上げられ、大妻精神を世に知らしめることになった。更に次の一歩に向けて活動を発展させていく必要がある。

6. この助成による発表論文等

Web サイト

①女子教育の先駆者 大妻コタカ

<https://www.youtube.com/watch?v=vouKmJ5tcsE>

②恥を知れ コタカ先生からあなたへ

https://www.youtube.com/watch?v=rLEDM_SymM8

参考文献

- 大妻学院 (1989) 『大妻学院八十年史』
大妻学校 (1926) 『設立十周年記念 大妻学校の過去と現在』
大妻同窓会 (1933) 『ふる里』7 巻第 1 号
大妻同窓会 (1954) 復刻『ふるさと』2 号
大妻同窓会 (1928) 『大妻時報』2 巻 1 号, 2 巻 3 号,
大妻同窓会 (1966) 復刻『ふるさと』20 号
高垣佐和子・泉良子 (1997) 「コタカ先生からあなたへ」財団法人大妻コタカ記念会会誌『ふるさと』50 号。
高垣佐和子 (2015) 「戦時下の大妻」一般財団法人大妻コタカ記念会会誌『ふるさと』67 号。
高垣佐和子・井上小百合 (2017) 「大妻家のルーツ—大妻家と大祝諏方家の関わり 序章—」一般財団法人大妻コタカ記念会会誌『ふるさと』69 号。
文部科学省 (2020) 『高等学校教育の現状について』

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (K2004) を受けたものです。